空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART　愛知県美術館友の会　会報　MEMBERSHIP　第 15 号

愛知県美術館 開館10周年を迎えて

開館記念日を前に

館長　長谷川 三郎

〈フォーヴィスムと日本近代洋画〉展の開会とともに新たな愛知県美術館が開館したのは1992年10月30日のことでした。以来10年が過ぎようとしています。振返ってみますと、この10年はひとり愛知県美術館のみならず、多くの美術館にとって厳しい変化に翻弄された時期であったと言っても過言ではありません。言うまでもなく、それは社会経済状況の変動の反映であり、国公私立を問わずさまざまな出来事がみられました。閉館を余儀なくされた私立美術館も少なくありません。愛知県美術館の場合を例にとれば、この間に企画展事業予算が半減し、一時期は作品収集の基金が凍結の已むなきに至るという事態を迎えました。

このような中で派生した出来事の典型として、文化庁所管の国立博物館美術館の独立行政法人化をあげることができるでしょう。これは行政改革の一環として「効率化」の名のもとに行われ、国立博物館美術館の将来あるべき姿が十分に論議された末に選択された施策ではありませんでした。けれども、国立に限らず広く美術館で働く学芸員をはじめとする「美術館人」たちも美術を愛する一般市民も、明確な美術館の理念に基づく説得力のある対案を提示することは出来なかったことも認めなければならないでしょう。

全国美術館会議という組織があり、その中の博物館法検討委員会は一昨年『美術館基準(案)』を発表しています。これを受けてさらに検討を続けてきた愛知・岐阜・三重の学芸員有志は、『日本の美術館の指針(案)』(2001年5月)をまとめました。そこでは社会(市民)、美術館、設置主体の三者を対象に「美術館のあるべき将来像」が「指針」として示されています。これらの提言の内容は未成熟であるかも知れませんが、美術館が主体的に自らの理念を確立しようとすることは重要な責務ではないでしょうか。そして同時に、「社会(市民)」と「設置主体」がこの試みに対等の立場で参加することが必要ではないでしょうか。〈友の会〉の充実と自立が期待される所以がここにあります。

美術館友の会の国際比較から思うこと

友の会会員　平野 孝雄

愕然としたこと

アメリカ・ヨーロッパ・日本の美術館メンバーシップ(友の会)会員数(表1)をご覧ください。日本と比べて、ヨーロッパは約10倍、アメリカは約100倍の会員数です。私はうかつなことに、アメリカのこの様な状況を、今年の6月に初めて知って愕然としました。

表1　美術館メンバーシップ(友の会)会員数　(単位:人)

国	美術館	会員数
アメリカ	グッゲンハイム美術館	9,000
	メトロポリタン美術館	115,000
	ボストン美術館	102,000
	シカゴ美術館	133,000
イギリス	ビクトリア&アルバート	12,000
	テート・ギャラリーグループ4館合計	57,500
ドイツ	アルテ&ノイエピナコテーク	330
オーストリア	ウィーン美術史美術館	5,500
日　本	東京都現代美術館	700
	世田谷美術館	850
	兵庫県立美術館	1,700
	愛知県美術館	400

100倍という差は大変な格差だといわざるをえません。アメリカではなぜ、10万人単位の会員がいるのでしょうか。

友の会会員になることの魅力と会員数

会員数≒A美術館の魅力×B税制×C意識×D友の会の魅力×…と私は分かりやすく表現ができると思います。

Aはコレクションの魅力が第一に挙げられ、展覧会の質と人気がそれに続くと思います。

Bは大差があります。アメリカでは、友の会会費を支払うとその大部分を税控除され、この率は大幅です。表2をご覧ください。例えば、グッゲンハイム美術館の例では、一般会員の年会費は9,400円ですが、その全額が税控除されます。上位クラス最高の年会費は94万円ですが、その内92万円が控除されます。他のアメリカの美術館の控除も、ほぼ近似しています。ここには、芸術に対する尊敬の念が認められ、芸術文化を単に経済の余剰と考えたなら、こんな大幅な税控除はできないと思います。

Cは芸術文化を大切にする心・社会に還元するという意識・友の会の位置づけ・寄付をしたり後援者になったりする習慣の違いが彼我の間にあると思います。

Dは友の会自体の魅力で、一般会員の特典、メリットについては、アメリカ・ヨーロッパ・日本の間で大差はありません。友の会の運営はおおむね近似しています（規模による差、金額による差はあります）。

以上の様に分析し、大胆に推論してみると、100倍もの差を縮めるポイントは、税制と美術館の魅力と意識にあるようです。

愛知県美術館の魅力と背景

愛知県美術館は素晴らしい美術館だと私は思います。コレクション・学芸員・施設・展覧会の企画・図録（カタログ）・研究活動・普及教育活動などのレベルが高いと誇りに思っています。しかし、コレクションの質と量・入場者数などを国際比較してみると欧米と日本との差は皆さんご存知の通りです。「ヨーロッパの美術館を見てきたのですが素晴らしいですね。」とある会員の人が言っていました。私も幾度かヨーロッパの美術館めぐりをやってみて、そこで日本人の鑑賞者の多さにいつも驚いています。それだけ需要があるのです。高いお金を払ってヨーロッパへ行かなくても国内に匹敵する「見たいもの」があれば、お客さんは国内で見るでしょう。

表2　アメリカの美術館メンバーシップ（友の会）年会費

美術館	一般	中位クラス	上位クラス
グッゲンハイム美術館	9,400円	6.3万円	～94万円
メトロポリタン美術館	5,500円	2.8万円	～38万円
ボストン美術館	7,500円	4.1万円	～25万円
ニューヨーク近代美術館	9,400円	5.0万円	～31万円
ロサンゼルス現代美術館	7,500円	3.8万円	～38万円

内容を充実するにはお金が必要です。フランスはそれを「税金」でまかない、アメリカは「寄付、友の会会費、税金」でまかなっています。

愛知県美術館友の会は独立した任意団体ですが、その一会員としてだけでなく納税者の一人として意見を申し述べるとすれば、当面、県の芸術文化関連予算を96年レベルまでもどしていただくようにお願いしたいと思います。

今年６月に愛知県美術館が入っている愛知芸術文化センター１階のアートライブラリーで「文化庁月報」を借りようとしたら、99年４月以降は買っていないと知らされがっかりしました。その他にも月刊誌は約３分の１に減らされたそうです。これは一つの具体例ですが、このような事では活動が衰退し、維持すら困難な状態です。

知事や県会議員をはじめ、財政を預かる方々にもどうか我々の願いを聞き届けていただけるようお願いします。

国家（県）戦略としての芸術文化振興

さらに美術館コレクションの内容充実のために、寄贈者が税の控除を大幅に受けられるように大胆に税制を変えてほしいと思います。寄贈者が美術館へ作品や資金を寄贈して国（県）民に喜びを与える。財務省は税を控除して寄贈者に応える。ここでいう税金は国家全体で考えればわずかですが、その効果は大きいと思います。

また昨年11月に「芸術文化振興基本法」が国会を通過しました。それらが本当に私たちのためになるものかどうか注目していきたいと思います。現在は国家経営資源の再配分が必要なのにそれがうまくできていないのではないでしょうか。一つの例をあげれば、平均寿命が世界一になった。それなら、「食べていくこと」「長生きすること」はひとつの目標を達成しているのですから、「心の豊かさ追求」へ（戦略をもって）転換すべきときだと思います。

愛知県美術館開館10周年を迎えて

10周年を迎える愛知県美術館と友の会の明日への思いから、いろいろと述べてきましたが、長期的に見れば美術館も友の会も発展途上にあると思います。よりよい美術館になってもらうには短期的に実現困難かもしれませんが、前記のように予算や、税制を変えることなどを私たちのこととして粘り強く願っていかねばなりません。

そしてなにより、足元に目を配れば、サポーターとしての友の会会員として、「美術館に行きましょう」と身近な人に声を掛けることなど、やれることがあります。

話し合って一歩一歩実現していきたいと思います。

ただいま準備中…

ミロ展　1918－1945

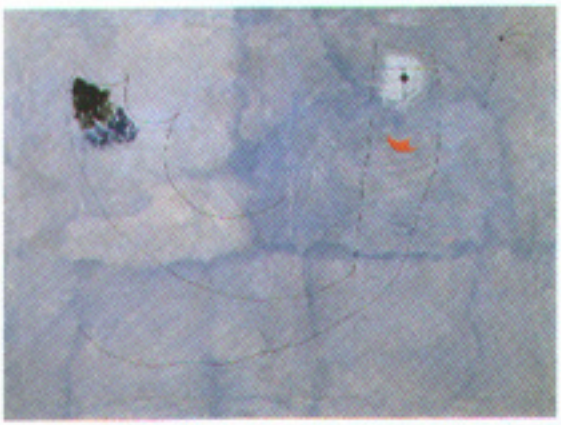
記念すべき開館10周年のこの秋、愛知県美術館では満を持して「ミロ」展が開催されます。10周年というだけに、スタッフがかける意気込みは普段にも増して熱いものが感じられます。

スペイン出身の画家、ジョアン・ミロの名はみなさんよくご存じでしょう。しかし、ゴッホやピカソほどに作品、人物について詳しく知られていないのも現実です。実際に振りかえってみると、名前は知られていても、展覧会という形で紹介される機会自体が少なかったそうです。このように私達がよく知っているつもりで、実はよくわかっていなかった画家ミロ。そのミロに真正面から取り組むことによって、通り一遍ではないミロの本当の魅力を発見できるものになりそうです。

今回の展覧会の特徴として、ミロの前期の作品を見ることができる、という点が挙げられます。これまでに日本で開催されてきたミロ展は後期の作品を集めたものがほとんどで、それは一般に知られているミロの「イメージ」を裏切らないものでもありました。しかし今回の展覧会ではそのいわゆる「ミロらしい」作品だけでなく、あまり目にする機会がなかった初期の作品や、さらに日本初公開の作品にも出会うことができます。そういった意味で、ミロのスタイルが変わっていった様を直接一連の作品を通してこの目で確かめられるという、ミロの展覧会としては今までにはないものが期待できます。

《オランダの室内》1928年
油彩、画布、129.9×96.8cm
メトロポリタン美術館　ニューヨーク
©Succession Miró/ADAGP,Paris&JVACS,Tokyo,2002
©Photo 1996 The Metropolitan Museum of Art

5年前から準備をされてきた担当学芸員の村上さんは、今回の企画展を開催するにあたり、本当にこのミロ展が実現するのかどうかという緊張！の毎日だったそうです。というのは、昨年アメリカで起きた9・11のあのテロ事件の影響で名画の貸し渋りがあったり、他にも昨今ヨーロッパで同じようなコンセプトのミロ展が開かれたため、それらと競い合うように作品を集めたという大変な苦労をされました。それらを経て、この展覧会が開かれるまでに至ったのですから、本当にありがたいことですよね。



《絵画》1925年油彩、画布、97×130cm、愛知県美術館
©Succession Miró/ADAGP,Paris&JVACS,Tokyo,2002

また、寝不足になって必死に取り組まれた図録においては、単に作品の解説をするのではなく、その作品が描かれた当時のミロ本人や友人、批評家の言葉も紹介されています。そのことにより、ミロが作品にとりかかっている時の心情やその時代背景をより鮮明にうかがい知ることができます。

さて、ミロ展の魅力が多少なりとも伝わったでしょうか。みなさんもぜひ展覧会に足を運んでいただき、ミロがどのような人物であったのか、そしてどのような考え、どんな作品を残したのか…、ご自分の目で確かめてみてはいかがでしょうか。

（湯田・伊奈）

＜開館10周年記念特別企画　ミロ展　1918－1945＞
開催期間：10月4日(金)～12月1日(日)
友の会特別鑑賞会予定：10月15日(火)・24日(木)

私のこの一点

《マグダラのマリア》　松井 和弘

中部イタリア、トスカーナ地方の州都フィレンツェの南東80kmにある、ローマ時代の遺蹟も残るアレッツォの町は、映画「ライフ・イズ・ビューティフル」で広く知られるようになったが、この街には15世紀半ばに制作されたピエロ・デラ・フランチェスカの聖十字架伝説のフレスコ画がサン・フランチェスコ聖堂の内陣を飾っている。

文化庁派遣の在外研修員として1年間このアレッツォの街に滞在して以来、すでに20年も経ってしまった。いずれ何かのかたちでと……数年ほど前から、ピエロのフレスコ画を中心として、実際ある状態を独自の視点で、日本画の素材と技法に拘りながらトライしている。

この3年、サン・フランチェスコ聖堂の聖十字架伝説を主として描いてきたが、一区切りとして、昨年は、大聖堂の《マグダラのマリア》に挑戦してみた。街のどこからでも、坂道を登っていけば、丘のいただきにある広場に出る。鐘楼が高く聳えるゴシック様式の大聖堂の姿を瞼に焼き付け、堂内に入る。広々とした石造りの空間は、薄暗くひんやりとした空気が身をつつんでくれ、ほっとさせてくれる。明るさにも慣れると見事なステンドグラスが浮かび上がってきた。《マグダラのマリア》は内陣左隅の聖具室扉の脇に、ともすると見落としてしまいそうな場所に残されているのである。ピエロの人物表現には、目、鼻、口等、特徴のある形と描き方で、我々の身近にいそうな顔立ちで迫ってくる。サン・フランチェスコ聖堂の聖十字架伝説の群像をすでに見てきているので、新しいピエロの作品に出合ったという感動を再度あじわわせてくれる。数少ない色で、緑、朱、白の使われ方は、後のラファエロの衣の表現にも用いられ、ひだの描き方はなかなか魅力的で絵画性を感じ、俗っぽくて、未完成っぽい要素が、むしろ、親しみさえ覚えるのである。

ピエロ・デラ・フランチェスカ《マグダラのマリア》
1460年頃、フレスコ、190×105cm
アレッツォ大聖堂

筆者紹介

1939年　名古屋市に生まれる
1965年　東京芸術大学大学院修了
1980年　文化庁派遣在外研修員としてイタリアに留学
1991年　創画会会員に推挙
現在　創画会会員・愛知みずほ大学教授

愛知県美術館　素顔の扉を開く

第三の扉　「保存」

ワールドカップは終わってしまった。他の学芸員と保存担当学芸員との大きな差を、美術館活動におけるオフェンス、ディフェンスにたとえる事ができるかもしれない。もし環境も万全で、作品も健全強固なものばかりなら、保存担当の活動には見せ場になるような華がない。古今東西、学芸員の活動が華やかで、保存担当が外からは目立たない美術館は良い美術館である（うちはどう見えるのだろう？少なくとも私はドイツのキーパー、カーンのような存在ではない。もっとも「愛知県美のゴリラ」なぞと呼ばれたならば、内心複雑なものがあるに違いないが）。

ただ、サッカーと異なり死守すべきはゴールのようなポイントではない。むしろ柵か堀のようなラインのイメージに近いものがあり、ますます焦点が当てにくく、仕事の内容の全貌を紹介するのは難しい。従って今回は会員の皆様にお願いをして、先に質問をして頂いた。少しでも活動の内容が伝われば幸いである。

作品を保存するのは次世代のため。だから次世代の環境も同等に重視する。限りなく無酸素に近い空間で害虫を酸欠死させるという、薬品に頼らない殺虫方法を共同研究中（写真）。

美術品保存Q＆A（会員のみなさんから）

Q.愛知県美術館で行われている保存に対する取組みは？

この点に関しては、ほぼ「人」と同じと考えていただいていいです（由一の「不忍池」など、120歳ぐらいのご高齢でいらっしゃいます）。常に健康状態を把握し、環境を整備します。この場合、環境とは温度・湿度、空気成分、光の量・質といった物理的な側面のみならず、取扱いや防犯、あるいは活用頻度といったソフトの面をも含みます。美術品も移動が多ければ必ず摩耗しますし、損傷するリスクも当然高まります。所蔵作品を過労死させたくはないですね。人気のある作品は他の館からの貸出依頼も多いので、できるだけ安全な輸送を考えることはもちろん、時には制限をも叫ばざるをえません（これからはカーンを見習います）。

それと我が国の特徴として、生物被害が軽視できないということが挙げられます。あの大火の多かった江戸時代ですら、貴重文書が失われてゆく原因は、火事よりも虫によることがはるかに多かったと言われています。現代の私たちの日常生活でも、例えば高級衣料（着物・毛皮など）の劣化原因は虫、カビ、ネズミがほとんどですよね。一頃これには化学薬品が多用されてきましたが、文化財分野でもその副作用の重大さを認め、できるだけ化学薬品は使わないようにしようという流れに変わってきています。

Q.家庭での美術品保存についてのアドバイス、劣化してしまったものに対しての処置等を教えて下さい。

前の話の続きにもなりますが、近年、文化財保存に関わる人達の間で、伝統的な民間行事であった「虫干し」「土用干し」等について再評価が進んでいます。「虫干し」を「日通し風通し」と呼ぶ地方もあるそうで、これは保存の上では「言い得て妙」な表現であり、まずは基本を押えた言葉と言えます。過度な酷使もいけませんが、しまい込んだままも、高温多湿な我が国ではよくありません。年に１度は（できれば２度、愛知県の場合は一番多湿になる土用の頃と、気温が急激に下がり始める11月から12月頃が効果的と思われる）お天気の良い日を選んで、風が適度に入る部屋で作品を鑑賞してやってください。この時、エアコン・扇風機・ストーブなどは我慢することです。また直射日光、蛍光灯も止めましょう。お肌同様、美術作品も紫外線は大の苦手です。そうして傷んだ所はないか、カビが生えてないか、虫に食われた所がないか等を点検してやってください。万が一、そのようなものを発見してしまった場合は、友の会のみなさんに限り、迷わず愛知県美術館の保存担当に相談してください。

（保存担当学芸員　長屋 菜津子）

新副館長就任挨拶

私の仕事　牧野 研一郎

新しい愛知県美術館が誕生してまもなく10年目を迎えようとしています。学齢でいえば小学校高学年といったところでしょうか。これまでのところ大きな病気もせず、事故もなくすくすくと成長してきた、と言ってもいいでしょう。これから悩み多き思春期に突入し、晴れて成人の日を迎えるまであと10年もあります。学芸スタッフの殆どは、美術館がまだ胎内にあるころから仕事を始めましたから産みの苦しみや成長の喜びを共有しています。この強い連帯感に基づく連携プレイの良さはこの美術館の誇るべき特質であろうと思います。仕事をするにあたって学芸スタッフの誰もが自覚していて、それがこの美術館ではあまりに自然なことゆえに誰もが口にしない言葉があります。それは自発性と自立性という言葉です。

コレクションの形成、展覧会の企画のいずれにおいてもこの二つの言葉がスタッフの間の暗黙の了解事項です。展覧会を例にとれば、情熱を傾けて企画を提案し館長を含む他のスタッフを説得することができれば、その自発性を尊重し展覧会を委ねてきました。ひとつの展覧会を開催するまでには必ず大きな障害のひとつやふたつありますが、自発性がバネとなってその障害をクリアできるのです。愛知県美術館がこれまでに開催した特色ある展覧会はこうした自発性の賜物なのです。

日本各地で開催される展覧会（特に海外展）の多くはマスコミの事業部などが組織したもので、そこにはやむを得ない事情もありますが、そのことが日本の美術館の成長の阻害要因ともなってきました。

愛知県美術館では開館以来、多くの困難を承知の上で手作りの展覧会を心懸けてきました。自立性の意味するところです。開館10周年記念の「ミロ展」はこの自発性と自立性を尊重してきた美術館の大きな成果です。今後もこの自発性と自立性を失うことのないよう見守ることが私の仕事ではないかと思っています。

子どもたちの絵

～ぼく、わたしの王様・お姫様～

みなさんの中で、「大英博物館所蔵 フランス素描展」を5月以降にご覧になった方はいらっしゃいますか。展示室の最後の部屋に、子どもたちが描いた絵がたくさん飾られていたのですが、印象に残っているでしょうか。

これらの絵は、ゴールデンウィークの特別企画「ぼく、わたしの王様・お姫様を完成させよう！」で、小学生を中心とした子どもたちが描いた絵です。王様やお姫様の肖像をコピーした画用紙を子どもたちに渡し、体の部分を好きなように描き加え、彩色も自由にしてもらったもので、全部で123点が飾られました。元にした肖像は、王様がフランソワ・クルーエの《アンリ2世の肖像》、お姫様がジャン・クルーエの《若い女性の肖像》で、いずれも「大英博物館所蔵 フランス素描展」で展示されていた作品です（写真中央）。

これが子どもたちの手にかかると……ご覧ください。彼らの自由奔放な構図、発想、そして主題を。写真の4点は私の独断で選んだものですが、もう余計な説明は必要ないでしょう。ごゆっくりご覧ください。　（森）

小学5年　男子

小学6年　女子

子供たちの手にかかると・・・

中学1年　女子

小学3年　女子

美術館から

～登録美術品と木村コレクション特別公開～

本年６月25日から３週間、江戸時代の文人画家として著名な与謝蕪村と浦上玉堂の作品（３件６点）が、登録美術品として当館で公開されたのをご記憶の方も多いと思います。いずれも国の重要文化財に指定された名作ばかりで、所蔵作品展のなかで、このような近世絵画の優れた作品を皆様にご覧いただけるようになったことを大変うれしく思っています。

ところで登録美術品制度というのは、多くの方にはあまり馴染みのないものだと思います。これは1998年に始まった新しい制度で、優れた美術品を国が登録して、美術館において公開することにより、国民が美術品を鑑賞する機会を拡大することを目的としたものです。具体的には、美術品の所有者からの申請にもとづいて、専門家の意見をきいて文化庁長官が登録の可否を決定します。そして登録された美術品（登録美術品）は、所有者と公開する美術館（契約美術館）との間で結ばれる公開契約にもとづき、美術館で５年以上の期間にわたって計画的に公開・管理されることになります。また、登録美術品は、万一相続が発生した場合には、一般の美術品とは異なり、物納の優先順位が国債や不動産等と同等の第１順位となり、相続税を登録美術品で物納することが容易になるという特徴もあります。

この制度に理解を示され、ご所蔵の貴重な作品を登録美術品となるよう申請され、当館での公開の機会を作ってくださいましたのが、名古屋市在住の著名な収集家の木村定三氏です。木村氏は既に昨年度、小川芋銭の代表作など多くの美術品を当館にご寄贈くださいました。そして本年度も、この登録美術品だけでなく、さらに多くの美術品を当館にご寄贈、ご寄託いただくことになります。これらの作品は、「時の贈りもの」と題して、2003年３月１日から30日まで特別公開します。どうぞ楽しみにお待ちください。

（美術課長　村田 真宏）

表紙の作品はケーテ・コルヴィッツ（1867-1945）《恋人たちⅡ》（1913年、1973年頃鋳造、ブロンズ）。愛知県美術館所蔵作品のひとつ。

前会長の訃報に接して

去る５月27日に友の会前会長の井関弘太郎氏がご逝去なさいました。井関氏は名古屋大学名誉教授で自然地理学がご専門ですが、美術も大変に愛された方でした。愛知県美術館開館まもなく友の会を立ち上げる為の理事会をつくられ、会長として基盤を築いて下さいました。鑑賞会にもよくご出席下さり、にこやかに鑑賞なさるお姿が思い出されます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（友の会会長　宮崎玲子）

編集スタッフから

前回は、他の編集スタッフが会報制作に格闘する姿を、傍らでウロウロしながら眺めているだけでした。今回初めて原稿を担当し、右往左往しながら何とか書き終えることができました。学芸員の方に直接取材させて頂く機会にも恵まれ、とても楽しい「格闘」となりました。（湯田）

今回は、「美術館友の会国際比較」を平野さんに、エッセイ「私のこの一点」を松井さんに寄稿して頂きました。また「開館記念日を前に」を長谷川館長に、「新副館長就任挨拶」を牧野副館長に寄稿して頂き、「保存」を長屋学芸員に、「美術館から」を村田課長に紹介して頂き、「ミロ展」を村上学芸員にお伺いしました。ご協力ありがとうございました。

編　集　水野 愛子／杉山 博之／森 健次
　　伊奈 由希子／湯田 文
協　力　愛知県美術館企画普及課

発　行　2002年9月

愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
愛知芸術文化センター内
Tel 052-971-5511（代表）内線347
Fax 052-971-5604
E-mail:tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館ホームページ：
http://www-art.aac.pref.aichi.jp/

デザイン／レイアウト　小島 篤／桑原 房子